



合川町に生まれた名湯

この町に温泉が出てもらいたい、と妻が言い出したのは、どのような思いの中だったのか詳しく聞くこともなく、その夜は妻の一人言の感で過ぎた。

時は、鷹巣駅から角館駅までの内陸縦断鉄道が走る合川駅の直ぐ前にある山喜旅館に泊まった時のことであつた。ここは北国の秋田県北部に位置する合川町である。

私達は、金婚式を迎えて結婚五〇年にもなるが、「ここに温泉が出てほしい」、などという話は前代未聞のことであつて、誰だつて温泉が出てほしい思いはあるかもしれないが、口に出してここにと場所を指定して、そんなことを言う人は聞いたこともない。

世に伝説めいた話はあることで、たとえば弘法大師が、ここからお湯が出ると言つて、手にする錫杖しゃくじょうで大地をついてひびかせたら、のちのちになつて、現在の秘湯といわれる山峡の温泉が湧き上がったというエピソードは、全国に少なからずあるようだ。

弘法大師ならずともそれと似たような逸話が世の中に潜んでいるかと思うのだが、その真偽のほどは別として、ここ合川町の駅前駅前に、本当に湯が湧き出たことを、平成元年二、三月ころに妻から聞いて知つた。新聞で知つたというのがいつの新聞かは定かでない。「やつぱりお湯が出たんだ」と言つて大変喜んでいた。

合川町と妻の結び付きとなつたのは、今から二五年前に起きた日本海中部地震があつたその年からであつた。

その震災が起きたのは、昭和五八（一九八三）年五月二六日木曜日の正午のことであつた。秋田県の日本海沿岸を中心にして、多くの尊い人命が犠牲になり大きな被害を受けたのであつたが、その中でもひときわ目を引いたのは、社会

科見学に胸ふくらませて出発した小学生の一行である。

秋田県庁、NHKなどを廻り、男鹿水族館へと進んだコースで、楽しいお昼の弁当の時間を前にして起きた、一瞬の悪夢であった。天を覆う大津波に呑み込まれ、海のいのちに消えてしまった幼い児童たちである。

秋田県北秋田郡合川町立合川南小学校の四、五年生一行、四五名の内一三名のいのちは、無言の帰宅となったのであった。

この遭難事故についてはその後、数年にわたり法廷論争となり、四年余にして和解決着されたと耳にしている。当時妻は、連日報じられている一三名の子供たちと、深い次元での魂の交流があったように私は受けとめている。それこそ潮騒のごとくに、子らの心のひびきを受けとめてきたのであった。そのことが機縁となり、何人かのご遺族の方たちと交流があったことから、確か菩提寺においての合同法要に参加したときであったが、家からは遠い地方のために、前日の夕刻出発して、その夜は、合川駅前の旅館に宿泊した。その時に、「この町に温泉が出てもらいたい」と、口をつけて出てきたのであった。それから五年の歳月が過ぎた昭和六三（一九八八）年四月のこと、その旅館から二〇〇メートルも離れていない個人の宅地から温泉が湧き出たというのであった。

その温泉湧出までの経緯は何一つ分からないが、そのニュースを新聞で知ったというので、妻からそのことを聞かされていた。

その後私が、妻には何一つ知らせることもせず旅に出たのは、平成元年（一九八九）四月二一日のことである。私は酒乱人生からの脱却のために自己改革の最中であったが、その日何かに押し出されるようにしてやみくもに旅の衝動にかられたのであった。

かくして無目的の旅は、帰宅するまでの四一日間を走り続けた。当てもない車中泊の旅は、妻に何の連絡もせずひたすら足の向くまま走っていたのである。それは多くの出会いと、神秘体験などいろいろと見聞を広めながら、三六日目には、函館から青森にわたり、一路国道一〇三号線を南下していたのである。

国道一〇三号線は、青森市から八甲田山を越えて十和田湖畔を半周し、発荷峠を越すと鹿角市を經由して終点の大館市へと続いている。途中鹿角市からは国道二八二号線と交差する。車中泊から目覚めたときはその日の方向を定めなくてはならない。風の吹くまま気の向くままの旅とはいっても、走る方向だけははっきりしなくてはならない。最初に思い浮かんだのは盛岡に出ることであった。一〇三号線から途中で二八二号線に左折することに決めて、盛岡経由で帰路に就こうと思ったのである。

ものの二〇分も走ったあたりで二八二号線の看板が出始めていたが、その頃から心にブレーキがかかり始めていた。

一〇三号、一〇三号が頭から離れないのだ。そればかりか合川、合川町へ一三名の子供たちと温泉、温泉の心がひびきだしていた。この時はすでに二八二号線は通過して盛岡への道程はどんどん遠くなるばかりであるが、一時間も走ったところでそこが森吉町であることを知った。合川町はすぐ近くである。その山中でわずかの平地に車を停めて、日課のヨガ行を終わらせて、さて朝食をと思ったが、そういう決まった食事は旅の中では一切無いのであって、この朝の食事は前夜十和田湖で一袋の黒砂糖ダンゴを買った残りがあるからその小さな四、五個で十分である。

ところがその袋を見て思った。縁になった一袋の品といえどもそこに記されている文字や、数字というものには、何かしらの因縁深いものがある。中森の松露という銘柄だが、実はこの地域は森吉町なのである。

前夜半、十和田湖を通過する時買った黒砂糖ダンゴの商標が「中森」であり、今、朝を迎えたこの地が「森吉町」の山中ということに、ここで、どうも文字的ひびきが気になった。何気なく買った黒砂糖ダンゴではあるが、その時すでにこの地に向けた方向性の

の意志が組み込まれていたのではないか。

心が向き続けた合川町には数分のところまで来ているし、盛岡行きをはねのけてまで、そして、私の理性を打ち消してまでも、ここまで引き寄せたエネルギーとはやはり、あの一三名の子供たちの魂であったのかと思わずにはおられなかった。

一〇三号、一〇三号と突き進めた一三名の魂は、数の魂となって迎えていたのではないか。やがて合川駅までたどり着き、そして、温泉が出たというあの話を確かめたくて、昭和五八年に宿泊した山喜旅館を訪ねた。妻がこの町に温泉が出てもらいたい、と言いつ出したのはこの旅館のことだった。

「温泉が出たという話を聞きたいのですが」
と、女将さんに尋ねると

「すぐ近くに出たんですよ」
という。

ここからものの二〇〇メートルも離れていない至近距離であって、個人の土地であるという。これは嬉しいことだと早速駆けつけてみたら、大きな一枚の看板が立っていた。看板の分析表を見たとき、素人なりにもこれはいい温泉だと感じた。全国の奥深い秘湯



は随分と歩いたが、これらの温泉にも劣らぬ名湯の雰囲気を感じたのである。水温が四八・三〜五三・〇度。湧出量は二〇〇〜九〇〇リットル。泉質が塩化物「強塩泉」・ナトリウム。名称がさざなみ温泉（漣温泉）と記されていた。それを見て私なりに、万病に効用のある願っても無い名湯の条件のようなものを感じたのであった。名称もまた実にいいのだ。「さざなみ温泉」である。もう一方の看板には、温泉効果抜群どうぞお持ち帰り下さいとあり、さらに温泉のある町づくり町民運動を始めているので、この運動に皆さんの参加を呼びかけているものであった。

私は、これらの温泉看板を見て足元が軽くなった。ゴムまりのようにぼんぼん浮き歩く思いであった。あたかも子供たちの喜びさえも感ずる気の高まりを感じたのであった。どうぞお持ち帰りをとあるから、自噴流出のこの温泉を一三名の子供たちに供えようと思い、ガラス瓶に入れて

菩提寺にかけこんだのである。

先ほど、山喜旅館の女将さんから、

「昨日がちょうど、子供たちの七回忌を終わるところです」

と聞かされているから、命日が五月二六日の昨日のことであり、さぞかし菩提寺は大忙しであったであろう。翌二七日に私が引き寄せられたのも、一つはお守りの中であったように思ったのである。

私に、青森から国道一〇三号線を走らせ、十和田湖では、中森の黒砂糖ダンゴを手になせ、今日は森吉町内でヨガ行をとらせ、盛岡行（国道二八二号線）を無視してそのまま一〇三号線を走らせたのであった。

一〇三号と一三名、一三八一三へと数霊に乗せてびびかす亡き魂のご意志。さらには、一三名の子供たちは、昨日が命日で七回忌が終えたばかりの静かな翌日に、おばちゃんも祈った

「この町に温泉を…」

と、そして、土地所有者のお力を借りて、湧き出た温泉を持参できてあいさつをするこ

この温泉は「強塩泉」という。さらに温泉名は「さざなみ温泉」というのだ。それだけでも海で遭難された一三名の子供たちの新たないのちの泉なのかも知れないと私は思った。合川町民一同に幸せ恵みの真心一点の温泉であると私には思えてならない。また掘り当てたオーナー御自身の、篤実な人徳に基づくものだと思っている。末長く町民に親しまれ、健康一番で、豊かな町民を見守っていただきたい。

温泉水を手にながら菩提寺の一三名の子供たちの写真の前に立った私は、一人一人の魂に、名前を呼び、あいさつをして温泉水を供えた。そして、最後の写真の一〇歳の女の子に、私は心の中で「信子ちゃんのお母さんはうちにもたずねてこられたんだよ……ありがとう」とあいさつをさせてもらい、ほっと気も晴れて魂の役を終えた気分ですこすこす後にした。

帰りには、正法院の母堂並びに清水住職夫妻より温かいおもてなしをいただき感謝を申し上げて、私は旅の続きへとおいとまをしたのである。

魂は死なず ——一三名児童のいのち

「合川町に生まれた名湯」に続いてここでも取り上げてみたい。幼い一三名のいのちが大海の津波にそのいのちをかえしたのは、昭和五八（一九八三）年五月二六日日本海中部地震の出来事であった。その子供達に結ぶ三つの話をしてみたい。

その一（昭和五八年初秋）

ぶかねぼとどかぬ道の尊きものと、証しをたてます合川一三名の子供達」と妻の心にひびき上がった心の光。酒田市日枝の里において次のような歌「子らのこころ（一）（二）」に託されたのは、昭和五八年初秋のことであった。ご遺族の方が家を訪ねられる前日のことであった。

世にのこされる子供達

(3)

生まれかわったよお母さん
つらいとおもうなお母さん
お役にたちますお母さん
うけてたちます子供達
願いかけたるつなぐ文字

子らのこころ (二)

(1)

幸せをつなぐ
酒田にみちがある
日枝にまいるねがいだけ



子らのこころ (一)

(1)

寝息をたてる横顔に
やさしく育ててくださった
だきしめてだきしめてお母さん
朝になるまで話してね
おとぎ話をきかせてね

(2)

陽なたのようなこの胸に
一生すみませぬ不思議です
一〇年あまりの生涯(いのち)でも
声をつないでくださるの

このかたに
めぐりあえたら声となる
一緒に生きます今日からは

(2)

すいれんの花に
たくしてほしい心のねがい
おばちゃんに
あえるその日をまちわびて
一緒にまいる日枝の里

(3)

子らの出会いを
だいじにされて
心のともづなつよくなる

合川の

まことしらせる子供達
一緒に生きますここから

その二(平成五年二月二二日)

ここでは、拙著・自分史『酒乱(米の生命が生きるまで)』の一節(二七九ページ以降)に記したものを転載している。

「酒乱童子の成仏」

生命を貫く因縁の凄さは、絶妙な生命力となって、子孫の生身の中で開花する。人の心の累積は、五代、一〇代、二〇代と引き継がれ、二人の親は四人となり、倍々と増えていく先祖たちは、四百年くらいで一〇二四人、七〇〇年では、一〇四万八〇〇〇人の先祖群団になる。

錯綜混沌として、ドロドロと溶解している人類の想念(心)は、我々の生命の中で祖

先霊（霊界心＝疑似魂）として、ピッカピッカの生命本体（真性魂）にからみつき、生きて生きて生き続ける生命力となる。

この因縁という生命力は、ちゃんとした意識体としてこの世に生きようとするから運命劇が始まるのだ。そして、この因縁の意識体（心）の舵を取るのには、あくまでも自分の意志の力なのである。

強い意志を育てることこそ、悪性因縁から目覚める唯一の手段であると実感した。

こんなことは、先刻承知のことだろうが、本当に心の中で、悪性因縁を打ち負かす意志力を育てるといふことは、頭の中で考えるように単純なものではない。私の酒乱性因縁も父の時代を飲み尽くして、さらに、酒乱童子の真つ赤な舌先が、子孫である我々にも及んだのであった。その因縁の結晶の吹きだまりが激突する。

以後決して飲むまいぞと、歯ぎしりしての抵抗も空しく、二三歳で因縁酒の洗礼を受けてしまった。牙をむきだし、燃え続けた鬼火は、因縁の心深く食い込んで、魂の傷口をどんどんと広げていった。

そして、妻もろとも呑み込むかにみえた悪鬼も、妻の、生命に生きて沈黙世界の師となる愛の光にはばまれ、ついには、手も足も出ないようになった。それとともに私の中

には生命の真実が芽生え始め、

そして、新しい意志力ができてきたのである。

酒乱二代、母が父に五五年、私の断酒まで二八年と心磨き期間五年間を合わせて三三年、親子合わせて八八年の長きにわたったが、神がたむけた二人の女のお陰で、人の道に目覚めることができた。妻もボソボソになった心身を引きずりながらも、不撓不屈の精神力の勝利となった。

流してならぬ悪因縁

手前一人の快楽を

ツケで喜ぶ親は鬼

泣くに泣けない子の不幸

知らずに生きてなるものか

我が身裂けても二度とまた

現世のツケはきつぱりと

消して花咲け末代までも

これぞ調和の人の道

いのちの原点ここにあり

「心霊へのいざない」（死後に残る津波の恐怖）

酒乱地獄に落ちてからは、毎日山歩きが日課となり、数多くの心霊体験をする中で、一つだけ、死に学ぶことができた。人が臨終を迎えたとき、思い残すこともなく、並い人達に感謝の心で旅立ちできるなら、人間として、至上の幸せだと思う。

人間の真の価値は、死の直前に凝縮される想念の明暗にかかっている。死の直前の思っただけは追体験できないし、臨終の人にそのことを伺うこともできない。死の瞬間、人は何を思い何を言わんとするのか、何を体験するのか：知る由もない。だが、この不可能とされていることを私は、一三名の津波で亡くなった子供達から教えてもらうことができた。

そのことにより、一種の臨終意識の体験化ができたような思いだ。人の死後に残していく思いは、死の直前の、今、消えんとする意識の中に、すべてが凝縮されるものだと思う。：中略：このことをはつきりと実感させてくれたある旅の一日を紹介したい。

それは、昭和六一（一九八六）年八月一六日お盆のこと、一本のコブ杉の大木と会う

ために出かけたのだが、捜し求める銘木は見当たらず、一枚の写真を頼りのこの旅は、見えざる手に導かれた魂の旅となった。

山間部を巡り歩く中、いつしか見覚えのある村にたどり着いていた。そこには、日本海中部地震の津波で亡くなった一三名の児童の菩提寺がある。ここへ来たのも子供達の引き合わせだと思い、静かな位牌堂に特設された一三名の写真に向かい、一人一人の名前を呼んで語りかけながら冥福を祈った。

そして車に戻りドアを開け足を人れようとしたとき、何かうしろでサアーツとざわめく感じを受けた。これは子供達だと直感した私は、「あつ：そうだ、子供達を車に乗せて行こう」という気になった。それで、左側のドアを開けて、「おうーい：みんなもいっしょに行こうか：」と呼びかけたら、急に子供達の喜びざわめく声が出て、つぎつぎと座席に乗ってくるのを体感した。「おう来た来たな」と思いながら、「みんな乗ったか：さあ行くぞ」といってドアを締めて走りだした。

それから村を出るまで、何やら子供達の賑やかな話し声を感じながら国道にさしかかった。ちょうど昼頃であったから、妻が持たしてくれた食事もあるし、セロハンに包んだ煎餅もあった。そこで「おじちゃんといっしょに煎餅を食べようか：ねえ」と心で

語りかけ、そして、運転を続けながら左手で煎餅を二、三枚握りしめて割った。「さあ：おじちゃん小さく割ったからなあ」と言いながら、今度は車を停めてみんなに公平にわたるかどうかと、セロハン袋を切り開いて数えてみた。「三個に割っていたので、「おうい…みんなにちょうどよく割れたぞ」と言ってから一瞬気が引かれる思いだった。無造作に割った煎餅が、亡くなった一三名の子供達に、一三個のかけらになっていたのだ。その時子供達がざわめきの中で、口を揃えたようにして声になった。「粉はおじちゃんのおぶんだよ」といのちの中からはつきりと聞こえてきた。割ったときの粉のことである。

亡き心は、この世を、どうしてこんなにはつきりと見えるのだろうか。この私のいのちの中に結ばれて、私とともに見ているのではなからうか。

このことを常識で考えれば、たんに偶然か幻聴にしか受け止められないであろう。だが私は、その必然性を信じて疑わない。子供たちの魂は永遠だということを。

再び出発した車の中で、しばらくの間会話が続く。車は先ほど来た道を逆へと走っている。やはりコブ杉のことが忘れられず、その目当ての村近くで尋ねることにした。

ある商店の主人は必ずあるという。大林村というところから右へ入る道があるからそ

こでもう一度聞きなさいと言う。村外れまで来て酒屋でもう一度聞いてみると「全くわからない」という。

だがそのおかみさんが、

「コブ杉はわからないが、毎年一〇月一〇日の体育の日になると、杉林へ子供達が遠足に行くようですよ」

と教えてくれた。世の中、意外と灯台下暗しで関心がなければ気づかぬことが多いものである。

不案内のままその分かれ道を奥へ奥へと入って行くで見事な杉林が見えてきたが、目的のそれらしい古木は見当たらない。そしてその林道はいつしか行き止まりとなっていた。

その頃からであった。子供達がしきりに喜びながら話しかけてきた。さも遠足にでも来ている感じではしゃいでいる。今度は車の中へ大きな蛇あづの出入りが始まった。それも子供達一三名の人数と同じくらいが勢いよく出入りする。しばし見とれていたが、早くここを出なくてはと思い、国道近くまで下ってきたその時、はつきりと子供達が話した。

「おばちゃんに花のおみやげもって行つてえ」と言う。妻に花のプレゼントである。

「うんうん、そうかそうか」

と、車を停めて外へ出た。左山裾には、色とりどりに秋の花が咲いていた。これもあれもと手にした花は、白いウドの花、薄紫色の萩の花、黄色いカラ芋の花、白銀のススキの穂花、紅紫色のミソ萩の花、この五種類の花が子供達からのお土産となった。

妻にとって一三名の子供達とのいのちの結びは、生涯忘れることのできないことである。妻の世界に沈黙世界の心が生きて通い結ばれたのは、この子供達が初めてであったからである。

水難にあつてから、「おばちゃんおばちゃん」と、心を寄せてくる。亡き心からも光と見えた妻のいのちだったのだろう。一心の愛で語りかける妻の心は、子供達とも強烈に結ばれたのだと思う。

さて花のお土産をいただいて車は再び走りだした。山間を縫うようにして進んで行き、途中で、昼飯には遅かったが鯉茶屋というドライブインで休んだ。

そこには大きな沼がいくつもあつて、クマ、タヌキ、鳥などがある小動物園があつた。

ので「みんな、ここで遊ぼうよ」と声をかけたのだが、今度は急に会話が止まつてしまった。「あれ…どうしたのかな」と気になりながらも、一人で見て回り、食事も終えてそこを出た。

そして、三〇分ほど走り続けると、人里離れた高原地帯が広がっていた。辺りには、カラ芋の黄色い花が天然とは思えない一面の畑となつていて目を見張つた。そして、その先を左折すると近くにダムと滝があるという標識が見えた。そうだ、ダムで遊んで行こうかと思ひ、

「みんな…ダムに寄っていくよ」

と心かけた。今度は急に返事が返ってきた。

「ぼくたち車の中にいるからおじちゃんだけ行つてくれ」

と言う声はつきりと耳元に聞こえてきたのである。それじゃ駄目だなあと思ひ、ダムで遊ばず帰路についた。その時すぐには気づかなかつたが、しばらく走っているうちに直感が体を突き抜けた。あ、そうか！ あの子たちは津波で亡くなったのだ！ 水が恐ろしいのだ！ 海のような沼やダム、滝は、命を失う恐ろしい場所だったのだろう。

津波による強烈なショックはどんなに恐ろしく、苦しみの一瞬であつたことか。この

世から消えるときの一瞬、その一瞬に凝縮されて幼い児童の脳裏を駆け巡ったのは、お父さんお母さんのことを思う間もなく、一口に自分を呑み込んだ青黒い怒濤の怪物であつたといえる。

そこによぎる意識は、恐怖の二字だつたと思えてならない。水難の恐怖に叫んだ一三名の児童たちにとって、死後において、初めて愛の心結びができたのは、おばちゃん（妻）ではなかつたのか。

沼のある鯉茶屋では急に会話が止み、「ここで遊ぼう」と言つても応答なし。私の心の呼びかけで子らは震え上がったのではないか。死の恐怖が重なつたからであろう。

またダムでは、「自分たちは車の中で待っているから、おじちゃんだけ行ってくれ」と言う。子供達の恐怖も知らずに声かけた私に、どんな思いで応答してくれたのかと思ふとき、私は心なき冷たさにさいなまれたのだつた。

この子供達に学ばせていただいた永遠の命を尊く思い、亡き魂の厳然として生きていく心の証しに頭の下がる思いだ。野山の草花に命が重なつて、おばちゃん（妻）のいのちに結ばれる喜びの一日となつた。

以後、声なき声は、五月二六日という命日の数に生きて結ばれることが多くなつた。

つい三日前の彼岸の中日のこと、朝からこの原稿を書いていて、子供達から教えられたことを是非紹介したいものだと思つた。妻と話し合つていた。真心からそう思うとき、その心は「思えば通わすいのち綱」となつて、亡き子供達の魂にむすばれてくる。それも数の魂に生き生きと通つてみせてくれた。三月二〇日の三時二〇分、墓参りの車中で、突然五二六ナンバーの車が目前に現れた。こちらが追いついたからなのか、あるいは追い越しをされたのかは定かではない。一瞬、無意識で心に向けた車こそ、子供達の命数五二六（五月二六日命日）である。また、帰宅時間もちょうど六時〇二分（六二二二六）だつた。子供達の命日の二六日と裏返しの日掌数字六二二となつて、表裏一体を示す数霊に生きて心を通わしてくれ。

こうして、その日一日の私達は、子供達と喜びを重ね合い、一日の宿り木（肉体生命）になつたと思えばよいだろう。

皆様にはなじみのない話となつたが、この世で亡き心が生きて通わす証しのナンバーと思えばよい。そして、魂の生きる証しのより所ともなり、さらに、生きていくひびきの証しとなるのがこの世の文字、数、色によつてであり、それらがまた、いのちの証しと関連していることは、山積する資料によつて、はっきりと表明できる段階に近づきつ

つある。

このように沈黙世界の心が、妻のいのちに生きたのは、酒乱人生の死線の中で、命を削って得た神からの賜り物だったにちがいない。

その三

老若男女にかかわらず、ある日ある時、ふと口をついて出てくる言葉や、予期せぬ行動など、自分でも分からないことが時にはあるものだ。そして、それが予期せぬ現実となったたり、それが幸不幸の両極であったり、決して科学では解明することのできない世界がいつの世にもありつづけてきた。ある不可解な言動が現実化することとはよく聞く話であり、それらのことがたんに偶然として打ち消され、理解されることもなく消えてゆく。

だがそこには言い知れない深さと、根源的で命の中で滔々たうたうと流れているある意志性が感じられてならない。一体それは何であろうか。実に気になるところである。科学的には、予期、予測というのがあり、霊的には、予知、予兆というのがあり、いずれに

しても、先々起こることを前もって知ることの世界になるが、そこには、天地自然の生命の源流のようなものを感じてならない。

言い換えれば、そこには絶対的な意志性の存在があるのかも知れないし、いわばこれこそが宇宙絶対調和力の意志的現れなのかと私は考えてしまうのだ。

それらの、とてつもない力がこのちっぽけなわれわれになぜ関係あるのかとなるのだが、それこそ、命あるからこそその自分たちゆえに何もかも綿々と連なっている一大生命界の一員だからこそ、何らかの啓示性を含めて、代弁させられているのかもしれない。

こうした考え方は、かえって漠然として曖昧模糊になるかもしれないが、こうした問題はもっと単純なことからその回答を引き出し得るかもしれない。ただここで一つだけ言えることは、事実として、私たちの命には精神的にも肉体的にも一大生命界に連綿として結ばれている接点があるのだ。すなわち、生命は同根であるというその事実を思う時、自分に心があると同時に天地自然にもその意志性を信じることはごく自然な話ではないか。

それらの謎解きは大難問となるが、やがてはその門戸の光が見えてくるであろう。

平成四（一九九二）年に読んだ本で『岳彦の日記』（けやき書房・岡三沙子編）の終章「別

れの朝のエピソード」を拝読して、津波遭難で亡くなられた一三名の一人、山上岳彦くんが、五月二六日社会見学に出席する直前に、お母さんに普段にはない言動を発したのを知った。その言動にこそ予期せぬ予兆が秘められていると思った。

普段は絶対に言うようなことではないことを、無意識に咄嗟のこととして口から出してしまふ。そして今、目の前に迫っている出発を前にしてごく自然に口から出てくる。

また今一つは、いつものことで遠出のときは間違ひなく、必ずお母さんに温かい心いっぱいで言う言葉が、なぜかその時は全く出てこないのだ。まるで、いつもの親子の会話が逆転していることに気づく。

それでは、五月二六日朝のことを拾い上げてみると、出発直前まで遠足のことも忘れつつ野球道具に別れを言いたかったのか離れがたき姿であったこと。またいつもなら遠出のときは「お母さん、おみやげ何がいい？」と、決まっていたずねるその言葉が、今朝は出てこないで、「お母さん、ぼくいなくなったら、淋しくない？」と、思いもしないことを言いだしたこと。

これらのことからそこには、どうしても岳彦君の心を覆い包んでいる意志性の発光を感じてならないのだ。その意とする発光源を、私は求め続けなければならぬと思った。

いのちは磁気・磁波・磁性体

いのちという名は誰が名付けたかは知らないが、いのち自身の自分でありながらも、いのちのことはあまりにも深く、遠くて手が届かない。そんないのちではあるが、求め続けることはいのちの果てまでも探求の道は続くであろう。

今朝はそのいのちのことでふと浮き上がるイメージがあった。いのちはこのころの源流であることを。そして、いのちの本体は磁気・磁波・磁性体であり、共振・共鳴・共時体の有視現象を起こすものであることを。またそれは生命元素（原子）の世界でさらにその奥の素粒子の世界に通じる遺伝子以前の世界であることを。

われわれは、食をいただくお陰で生命元素が分子となり、細胞ができて、そして五体をつくる役割分担の細胞に分かれ、こうして今日食べた食物は立派な五体をつくつてくれるし、五感で心をつくるまでに仕上げてくれる。